「活動」を行うにあたって

「行茶活動」とは、平成１９年の能登半島地震、新潟中越沖地震の際に被災地の避難所や仮設住宅の集会所などで青年会員により実施された支援メニューであり、被災者にお茶やコーヒーを供することを指す。

近年は、災害被災地での“サロン活動”の重要性が災害支援関係者の間でも広く認識され、その一端を僧侶が担う意義は非常に大きいと考えられる。

☆趣旨・目的

・被災者に寄り添い、不安を軽減し、被災生活の苦労に耳を傾ける。

・その時々の困りごとを把握し、支援策に反映させる。

・被災者同士のコミュニケーションを促し、孤独感を取り除く。

→上記のために、ペットボトルやインスタントではなく目の前で急須にお湯を注ぎ、コーヒーメーカーで提供するお茶やコーヒーによって、被災者の心を開く効果が見込まれる。

☆必需品

・お湯ポット、ミネラルウォーター

・急須（多め）、コーヒーメーカー２、コーヒーポット２(移動時こぼれないもの)

・茶葉(緑茶･番茶)、コーヒー豆、紅茶パック、カルピス（主に子ども向け）

・フィルター･ミルク･砂糖･スプーン

・紙コップ沢山(ボランティアセンター・避難所にも多数保管の場合あり)

・お菓子（廉価なものでも可、調達可能ならば各地の名産などは会話のきっかけにもなる）

・お盆（大・小）、菓子器

・ゴザ、レジャーシート、座布団、小テーブル、ゴミ袋

・おはなし表、下敷き、筆記用具

付記

・洗い場が確保でき、かつ人員の余裕があれば湯呑み茶碗、コーヒーカップを用いた方がなお望ましい。ただし、衛生管理には注意すること。

・電源が確保できない場所は、あらかじめコーヒーをいれてポットで持参も。

・夏場は「かき氷」も有効。その際はかき氷機、シロップ各種、カップ、スプーン持参。

☆留意点

・避難所(施設長･医療班･保健師など)やボランティアセンターの許可を得る。

・ある程度の継続性が保たれる実施場所が望ましい。避難所だけでなく、集落や仮設住宅の集会所、境内等でも可。

・地域とのつながりを保つためにも、宗門檀信徒など宗侶へのなじみや理解がある避難

所や地区の担当者を把握し、理解や協力を求める。

・活動拠点の確保（集合場所、備品置き場、お湯の準備など）。

・避難所入口にて消毒・衛生管理の徹底（必要に応じてマスク着用の義務も可能性あり)。

・宗教色は極力出さない。布教や勧誘の場ではないことを意識する。絡子・改良衣は不要。必要に応じて、会話の流れから身分や立場を明らかにすることは可。宗侶としての振る舞いを正すよう心がける（あいさつ・履き物の整頓・喫煙など）。

・お菓子等は各地の名産品を用意できれば話のタネになる。毎日同じものにならない工夫が必要。

・「おはなし表」を毎日必ず全員記入。ただし不要なプレッシャーを与えぬよう、被災者の前では記入せず、行茶実施場所を辞した後に記入すること。リーダーは要点をまとめ、避難所責任者やボランティアセンターに報告。

例：「避難所は乾燥して唇が乾くのよね」の一言を聞きリップクリームを購入、次回配布。

例：アトピー発症の子を発見、医療担当者に伝え対応を検討する。

・継続することに意義がある。なるべく回数を重ねていくよう心がける。

・ただお茶出しするのではない。被災者への寄り添い、心の支え、心のキャッチボールを意識。表情や会話の中に潜む不平・不満・不安・ストレスを観(感)じる。会話は質問攻めにならないよう、また話し過ぎないように心がける。時には“間”も必要。

・人数の多さを競うのではない。参加者が少人数でもいい。大勢より、一人ひとりの心に寄り添うことを主眼とする。